

# おおよまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成17年  
6月号

毎月23日発行  
通巻418号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成17年6月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★振替口座 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



「一本道」 青森県弘前市 石田勝利さん撮影(文・6頁)

## 大倭病院総長として月例職員朝礼での講話より(下)

# 人生の最も悟らなければならないこと

平成4年9月・11月・平成5年1月

法主 矢追日聖

(五)

今月はご存知のように、老人福祉の月間ということになっておりますが、言うてる私も、もう八十一歳ですから老人の中に入るんです。言い替えれば、何とか長生きしてきた人間ということになるだけなんです(笑)。

若くして亡くなる方もおられるし、また私みたいに身体が弱くても長生きさせてもらっているような者もおります。まあいろいろですけれども、やっぱり老人に対して尊敬するということは非常に有り難いことだと私は思っております。

現在の老人というのは、七十歳から九十歳ぐらいの人で、みんな大つきな戦争を生き延びてきてるんです。若い皆さんには経験のないことだと思えますけれども、一番困ったことは食糧難ですね。それでも国をあげての戦争でしたから、一生懸命に働かなければならないし、頭の上から爆弾が落ちてきたり、火が降ってきたりする中を、何とか生き延びておるんです。とにかく七十歳以上の者が集まったら、お互いに精神的、物質的に苦労した時の話になってくると思うんです。

特に第一線には立たなかつたけれども、銃後の守りつていうか日本の国の中において子供を育てたり、主人を戦争に送ったり、我々が想像できない悩みを持って生きてきたのが現在のおバアちゃんなんです。ですから、お年寄りに戦争中の話をしてあげると、たいてい涙こぼして喜んでくれますよ。それは過去に苦労

してきたことを、今の世代の人に分かつて欲しいという何かの望みがあるんですよ。

けれども、やっぱり老化してくると思ってた来ますし、病気になる。そう言った時にお世話になるのは病院なんです。肉体的な病気は医者さんがおられるので医療の方は充分と云えても、もうひとつ精神的な潤いというものを与えてあげて欲しいなと思うんです。今のお年寄りは非常に苦勞な時代を乗り越えてきているだけに、例えば自分の子供に対していろいろと期待をかけたたり、あるいは隣近所の人とお互いに親切に暮らしていくとか、とにかく心の潤いということが一番望んでいると思うんです。それが、まあ何か気儘なというような形で出てくる人が多いと思うんです。

健康な時には、お互いに仲良く助け合って暮らしていけますけれども、肉体が病んでくるともちらん心の病も出てきます。そうした時に、その人が生まれながらに持っていた自分の個性、性格というものが極端に出てきます。それはやはり理性というものがないので、今まで人に言わなかったことや人の嫌がることでも平気で言ってみたりするんです。これはもう仕方ないことだと思わね。

だから皆さんは、お年寄りの気儘なこと、無茶苦茶なこと、訳の分からないこと、そういう言動があつても、腹を立てないでやんわりと受け止めて親切にしてあげて欲しい。そしてまた、心を慰め、心に潤いを持たせるような言葉遣いや態度が特に必要だと思わね。

私も、うちの老人ホームで寮長としてしばらくやっておりましたが、その中で極端に寂しがるお年寄りがありました。そうした時に、やはり職員さんや寮母さんの数が少ないから、五十人みんなの一人から十までかゆい所に手が届くような介護と

いうものが出来ません。寂しくなると、人に来て欲しいものだから、自分が巻いているオムツの中に手を突っ込んで大便を出してベッドのあちこちに塗りつけるんです。そうすると寮母さんがワーワー言つて寄つて来てくれるし、裸にして風呂に連れて行つてくれ、みんなして介護してくれる。それが無上の楽しみになるんですね。

また、お年寄りにとつて病院は、人生の終末の所だと思ひます。過去にどれだけいろいろと苦勞していても、病気になるってベッドに寝た時、お医者さんや看護婦さん、介護の方々に本当に心から親切にしてもらつたら、「この世の中に生まれて来て結構やつたな」「自分の人生は幸せやつたな」と、そういうような心境であの世へ行くようになっていくのです。だから、本当に精神的に喜んで、そしてあの世へ送つてあげるような心の介護ということが特に必要だと思わね。

特に今月は老人福祉の月ですので、皆さんにはそのような意味で精神的な介護というものを、病院の中において心得てやつて頂いたら有り難いなと思わね。

## (六)

皆さん、おはようございます。

大倭殖産の取締役で土木部長の福田努さんが亡くなられてまして、昨日お葬式がありました(※平成四年十一月四日)。また皆さんにもいろいろご心配をかけたたり、見送つてもらつて非常に喜んでいたと思ひます。

福田さんは、元々、FIWCという奉仕団体の関西委員会のメンバーの一人として、学生時から大倭へ出入りしている真面目な子でした。FIWCは全国の組織で、Fというのはキリスト教のフレンド派、Iはインターナショナル、WCは奉

仕団体、ワークキャンプの意味なんです。それがいろんな因縁で大倭殖産へ入つて、土木部の仕事を責任持つてしてくれていたんです。

お葬式の時はお互い感じることですが、やっぱり人間というのは死ぬんです。まあ理屈で言えは、生まれた時にいつか死ぬことは決定的なんです。生まれなければ死ぬことは無いが、生まれた限りは死んでいく。これはこの世の中、現象界の鉄則なんです。形として現れたものは、いつか消えていく。そんなこと言つと、この地球でもいつかは消える日があるかも分かりません。そういうようなひとつの悟りです。

例えば皆さんでも、自分の親とか兄弟、子供が亡くなつた時に、「何で死んだんだろ」「もうちよつと生きて欲しかった」つて、誰もが思うものです。これはもう離別の苦しみ、人情の問題ですからね。けれどもやはり半面は、割り切らなければいけないと思わね。

昨日のお葬式の時でも、日本のことですから、参加している方はいろんな宗教を持つていて思ひます。どこの家でも仏教というのは、日本の国教のようになっていきますから、ほとんどが仏教の信者になっています。浄土宗もあれば浄土真宗もあるし、禅宗や日蓮宗というのもある。そういう風に仏教にはまたたくさん宗派があるんです。ところが、何か自分にひとつの信仰があれば、その宗教が一番結構で、唯一絶対的なものやと。まあ邪教とまでは思われないけれども、信じている宗教以外のものは良くないと考える人が多いんです。

宗教というものは人間の心を訓練する場所なんです。精神的に向上していくように人徳を養成したり、どうすれば皆が仲良くいけるか、幸せにいけるか、そういうものを修養し、訓練していくのが人間として最高の教育で宗教というものだと私

は思っています。

宗教の世界ではどこでも多分、犬も猫も植物も動物も、そして我々人間も、全てが平等に天地自然の力によって地球の上に生存させてもらっていると教えられてると思うんです。自分の力で生きておるのではなく、生かされておるんです。だから、皆が仲良くしなければいけないんですが、肝心の修養しなければならぬ宗教に入りながら、他の宗教に対しての偏見を持っているんですね。これが日本の宗教の一番つまらない所だと思えます。

ところで、何でそんな偏見を持つのかと言うとそれは結局ひとつの宗教を信仰したら、神さん仏さんの力で幸せにしてくれるやろう、病気を治してくれるやろうと、そういう依存心で宗教にすがっている人が多いんだと思うんです。日本の宗教団体の数がどのくらいあるか分かりませんが、あっちやこっちの宗教に入り、何とか幸せになりたいと思っています。

しかし本当に幸せにしようと思えば、自分の人間関係を良くすることが第一条件なんです。親とか兄弟や親類、あるいは友達、そういういろんな人間関係の中でまず皆と仲良く出来る自分を作っていく。それが人生の幸せやと思うんです。いくら拝んでも、神さん仏さんは絶対に人間を幸せにはしてくれません。けれども、幸せにするような心だけは天地自然からもらっておるんだから、皆が幸せになるように、自分でそういうような心の世界を作っていくかなければいけないんですね。

亡くなった福田さんは浄土真宗なんですが、お葬式する場所が大倭教という、世間から見たら神道とか神さんと言います。けれども、私は神道と思っと思っています。大倭の宗教は、仏教が入って来る以前の日本列島において、日本人が固有の信仰

を持ち信心していたという、古来の信仰の形態を私は踏襲しています。今は、宗教法人の制度になってますから、宗教法人大倭教と言ってますが、その内容は古代において日本人達が信仰していたその心を私は受け継いでいるつもりなんです。

例えば仏教あるいはキリスト教が入って来てもすぐにバツと受け入れる。日本人は和やかにして大らかな民族なんです。それは、日本在来の古代の宗教としてそういうような人間を作って来たと思うんです。神さんも、我々も、全部ひとつであるという考え方なんです。

だから、神社にお祀りしてても、私は神さんと思っと思っています。どこの神社に祀ってる神さんでも、千年や二千年前に亡くなった人間なんです。飯も喰い小使もし、我々と同じことをして来た人なんです。だから、我々が絶対に帰依しなければならぬような神さんではないんです。同じ人間同士で、皆さんの先祖さんなんです。人格神です。

神さんというのは、我々万物を生かしてくれている宇宙の生命体、これが神さんなんです。この心臓を動かしてくれてる力も、あるいは呼吸させてくれるのも神さんです。そういうようなものは神さんだけれども、神社とかに祀ってあるのは、神さんではなく我々の大先輩なんです。日本人というのはそこが滅茶苦茶になつてるんです。

例えば、お葬式を仏教でする時にお社に祀つてある神さんの所に白い紙を貼るんですよ。それは穢れているから、神さんにすまないからと言うんだけれども、その神さんは我々の前に死んでいる人格神ですから、人と同じことなんです。だから私はいつもそんな紙を貼ったりしませんよ。うちの拝殿でお葬式した時でも、中には人格神が祀つてあるけれども、その前でお葬式するのは何にも

失礼ではないんです。ただ、それを仏教であるのか、神さんの型であるのか、形式の問題だけなんです。

大倭は神さんの道であると言うけれども、仏さんの道でも、キリスト教の道であっても、結局これは全部同じことなんです。大倭には、そういう意味の偏見は持たしておりません。だから、うちの拝殿でお線香あげてお経や念仏を唱えてはつても、うちの人達は不思議に思っません。けれど世間では、同じ宗教同士でも宗派が違つたら、それは通用しません。大倭の宗教はそういうような偏見を持たない、大らかな、和やかな、古代の日本人の心によって、昨日も神さんの所で仏教式のお葬式をしましたが、そういうことを皆さん方も認識して欲しいなと思うんです。

また、皆さん方も一人ひとり生まれた所は違つけれども、この職場で一緒に仕事しているということは、非常に深い深い因縁のある人ばかりが、ひとつの同じ屋根の下におるんです。だから、他人と思わないで、自分の親、兄弟というような気持ちで、ここで仕事してもらいたい。また、患者さんも何かのご縁があつて、入院されて来られるんですから他人さんではございません。自分の身内の人が入院しているという気持ちで、お医者さんのお手伝いをしたり、介護の面において心から皆さん仕事して欲しいなと思います。

## (七)

明けましておめでとうございます。終戦の年、昭和二十年を大倭元年と計算しているの、今年は大倭四十九年の春、一般世間では平成五年でございませう。

こうして年が明けると、新しくいろんな物事を始めることになるんですけども、物事にはひと

つの節というものがなければいけないんでね。こうして一年間地球が回ってくると、また一つ年が改まりますが、結局一年経てば経つ程、はつきり言えば、墓場に近づいて行くんです。

だから生きている間は、お互いに人間関係を密にして、仲良く楽しく一日でも暮らしていくのが人生として最も有り難いことだと、私はいつも思っております。

本質的に考えれば、自分の所有しておる物はこの世の中には何にも無いというのが、私個人の昔からの人生観です。自分の物というのは心だけのことなんです。例えば財産や不動産、あるいは家でも私物と言いますけれど、本質的に自分の物ではなく全部が借り物なんです。

自分の肉体そのものも借り物ですよ。人間というのはこの世に誕生した限りは、その日から死ぬということが付いて回っておるんやから、生と死というものは裏表の関係になつておるんです。我々が死ねば、考えてごらん、自分の肉体ですら火葬場でパーツと焼いてしまつたら三界の煙となつて消えてしまい、白い骨が残つていてもこれはもう自分の物でなく、墓場へ持つていくか、海へ投げるか、結果はそうなつてしまう。だから病院で患者さんをお世話している時、治つて喜んで帰る人もあれば、亡くなる人もいる、そうした人間の人生の中で最も我々が悟らなければならぬ職業に皆さんはついておると思うんです。

また、人間が争つたり仲が悪くなつたりすることがあるわけですが、これは自分の物という我欲執着のあることによつて、いろんなトラブルが起これると思うんです。自分の物は何にも無いんだと皆さん思つてごらん下さい。本当に空な気持ちになれば、誰でも仲良く暮らしていけると思っています。やがては死にますけれど、その日その日を

大事に暮らしていくということが一番有り難いことなんです。

まあ、私も去年は皮膚病になりました。初めのうちはジクジクとしていて、ガーゼを当てておけば済む程度でした。別に医者に治療してもらう程でもないと思つて、まあ十年程放つておいたんです。ところが、一昨年あたりから、その範囲が少し拡大して来たんですね。十年放つとも動かなかつたものが動き出したから、これはちよつと良くないなということで皮膚科の先生に診てもらつたら、ベーチエツトというトルコのお医者さんの名前らしいですが、聞いたことがない皮膚病でした。いろいろ薬を付けても治らないらしく、そのまま放つておいたら癌に変化する皮膚病らしいです。だから、「まだリンパの方にいつてないから、今の内だつたら大丈夫ですよ」つて言われ、その部分を取つて、別の皮膚を剥いて貼つたらいいという簡単な話でしてね。それならそうしてもらいましょうと、去年の十一月十七日に手術して十二月五日に退院させてもらいました。言つてみればゴルフ場の芝生を植えるような形だと思つてます。縫つてもらつた時は全身麻酔だから痛くも何とも無いけれども、今度は治つた所から三日程かかつて糸を抜いてくれたと思うんです。最後に抜いたのは、金属の物でパチパチツと挟んでもらつて、「先生、これ抜くの痛いんですかなあ」と言つたら「心配しなくても女の人は皆経験してしまつよ」と、笑つておられました。何のことか知らないけれども。

お陰さんで、こうして今年も顔を合わせて、同じことを繰り返して出来るというのは非常に有り難いことです。皆さんの前でお話出来るということが無上の喜びなんです。今のところは頭の上から足の先までいろいろと検査してもらつて、別に

大した所はないと言われたので、癌になつても、四、五年は命あると思うんですけどね。だから、八十四、五歳までは何とか人間の世の中に置いてもらえるんだと決めつけて、この世に心残りのないよう毎日いろいろと努力して、あの世に行く時に喜んで行ける人生で生きたいと思うんです。

人間というのは年をとつてくると肉体が老化してくる。そうなるも精神的にも老化して、何か物寂しい秋みたいな雰囲気になつて来るんですよ。だから人と会い、お話することが唯一の楽しみなんです。もう前も言う事聞きませんし、女性にも魅力を感じないし、飯を喰うだけのことですから（笑）。

皆さんは若いから、いろいろ楽しみが多いけれども、八十一歳にもなると人生の楽しみは段々薄くなつて、最後は火葬場に行くことになるんです。それでこの世の終わりということですが、物の始まりは、全て物の終わりであつて、「ホギヤ」と産まれたその日から死ぬということが付いて回つておるんです。ですから、物事をあまりにも我利我欲にとらわれないで、人と仲悪くしないで、これは自分の物やというふうな、そんなものにならないことです。

皆同じ空気を吸わせてもらつて、天地自然の中で同じように飯を喰つて、糞こいて、そして小便して生きさせてもらつておるんです。そういうような大乘の立場から見た時に、あの人好きや、この人嫌いやというふうなことをしたら、皆さんに對して済まないと思うんです。お互いに誰とでも皆仲良くして、精神的に喜びを持っていくということが一番大事なことだと私は心得ております。

今年も、お正月は非常に良いお天気でした。天の気は良かったです。今年は大災は少ないと思ひますけれども、大災は去年と同じようにあると思

います。車に乗っている皆さん方は、特に気を付けて、そしてまた病気にもならないよう気を付けてほしいと思います。

今現在、豊富な食料を持っている日本の国に産まれた我々が、幸せか否か知りませんけれども、あまりにも文化生活しているためにいろんな病気が起こりやすいんですね。良いこともあれば悪いこともあるという、これはもう陰と陽の裏表の問題なんです。経済的に豊かであり食べ過ぎるし、何処へ行くにも車に乗って、排気ガスを出している。その中で生きておるんやから、反面、我々の肉体に対していろんな害が増えて病気が起こってくるんです。また、お医者さん達は、それがために研究もされ、出来るだけ我々の命を延ばすように、医療の方でやって頂いておるんです。

# 時の波蕩(その十三)

## USHERD

林 修 三

虹が架かった。遠く私の家のあるあたりに。自分は何故いがみ合い、罵りあい、自分を強く主張するのだろう。長く連れ添った妻とも、その歳月に幾度もの修羅場があった。

あの遠い空の虹のかかる辺りにも、いくつもの家があり、いくつもの喜び、哀しみ、そして悩み事が渦巻いている。人は何を求めつづけ、こんなにも平和な空の下、こんなにも混乱しきっているのだろう。ある時は地位に、ある時は金銭に、又ある時は電車の中の小さな一つの席にむかつて……。様々な歴史上の出来事も、現在この世で日夜練り広げられている出来事も、詰まるところは凡て、一人一人の人間の心の有り様に起因してい

この頃若い人を見てみると、人のことよりもあまりにも自己主張が強くなってきてます。全体に対して、人のことよりも我がのことというね。それでは世の中皆仲良くいかないと思うんです。本当に幸せにいきたいと思えば、周囲の人達が皆幸せでなければ、自分の幸せは保証されないと私はその信念を持っております。

だから、今後とも皆さんと共に喜んで生きさせてもらいたいし、仕事もしていきたい。私はもういつくたばるか分かりませんが、生ある間は福祉の仕事とか、あるいは医療の仕事に自分の精魂を打ち込む覚悟であります。皆さんと共に手を携えてやっていきたいと思しますので、どうか宜しくお願いします。今年もひとつ、仲良く、お互いに頑張りましょう。

るように思える。そしてそれが数多く集まり、一つの大きな欲望となつて現実を導いている。我が国においても、歴代の天皇家を中心とする

貴族や、家臣群の心の争いが、多くの悲劇と苦しみ、この国にもたらして来た。心を修め、心を磨き、「神ながら」の道を往く事は、それほど至難な道なのだろう。しかし又、この世に生を受けた者は誰もが、その己自身の心を、各々の時 処 位に応じて磨き続ける使命を帯びているはずである。例えささやかであれ、其れ其れの大切な人生の場に、凡ては用意されているに違いないのだから。そして私自身の人生においても、数多くの友人や家族、敵対する人々と共に、三人の人生の師が与えられた。矢追日聖、クリシュナムルティ、林順子の方々である。大いなる感謝に、大いなる親しみを添えて、ここに書き残しておきたい。

夜を込め ののしる言の葉 つき果てて  
白む夜明の むなし愛し



昨年十一月の大倭会文化講演会で、吉野の川上村にある「森と水の源流館」の成瀬匡章さんに「古代人の水と森への想い」というテーマで話していただいたのは記憶に新しい。そんなご縁もあって、川上村で保全している吉野川 紀ノ川源流に位置する約七四〇ヘクタールの「水源地の森」と呼ばれる原生林(右写真)に、大倭の有志の人達と二回にわたつて遊びに行った。そしてその森の生命の豊かさに心が洗われる経験をした。

たまたま、この森を対象にして全六回の「源流の森案内講座」が開かれると聞いて、「これだ!」と飛びついて参加することにした。森の生態などについては全く初心者筆者だが、今年の十一月に講座が終了するまでに、折を見てその様子を報告していきたい。

講座は、五月二十二日の第一回目から型破りだった。場所は森の現場ではなく、森と水の源流館の近くの屋内で行われた。しかも、講師は、ラコタ族というアメリカ インディアンの精神文化に惚れ込み、彼らの居留地で長年住み続け、今は日本で学級崩壊したクラススの建て直しなどの仕事をしている松木正さんという変り種の人。何が始まるのかと思つたら、ボールを取り出して、「これを相手のイノチだと思つて、ていねいに心を含め

「受け取るように」と言つて大真面目に集団キヤツチボールを始めたのだ。  
段々わかつていくのだが、森の自然を他人に伝えるためには、まず自分自身が自然や他人の命に對して開かれた心と感性を持つていないと、何も伝えられないということ、松木さんはほくらに体でわかつてもらおうとしていたのだ。

## 私説 神々の古代史

青森県弘前市

石田勝利

八世紀初め、女帝持統天皇とその右腕 藤原不比等が編纂させた『古事記』『日本書紀』を読むと分かるように、その内容は不可解で難しい。矛盾に満ち理解に苦しむ。この物語を自分なりに整理して、納得できるようにとの衝動に駆られたのが二十年程前のこと。これらの古代史を、なぜあの時期に集中して世に出さなければならなかったのか、何かを隠さんが為としか思われぬ。原因の源を探る為には、もつと時代を遡つてみなければならぬ。私の神々の古代史の物語を語つてみたい。勿論フィクションです。

紀元前ペルシャのヒッタイト帝国では製鉄技術が行われていた。太陽信仰を持つその一派は、日の出を求め東へと移動し始めた。インド、中国、朝鮮半島へと進み、日本海を渡り日本へと上陸。場所は津軽半島の十三湊、大きく広い淡水湖と森の山脈に囲まれた、美しく暮しにはもつてこいの恵まれた土地である。  
原住民は居た、津保化族である。狩猟と採集での生活を営む津保化族は、海から現れたこの渡来人を神と崇え、天津神（海津神）と呼んだ。天津神は高度な文明と技術を持っていた。織物技術か

松木さんの語るラコタ族の儀式では、亡くなった人や動植物の魂も含めて、「すべてのいのちがつながっている（ミタクエ オヤシン）」という意味の言葉がくり返されるそう。アメリカ流の「神ながら」と思わざるをえないような話が多くて、一日の講座があつたという間に終つた。  
いよいよ次回には森に入ることになる。

ら漁網の作り方、器の焼き方、植林、農耕と稲作、青銅鉄技術。それまでの衣食住の苦労から解放してくれた。さらに文字の使用も教えてくれた。津保化族の住む土地は豊かになり「日高見国」と名付けられた（世界遺産白神山の語源）。  
やがて天津神一派は拠点を拡げつつ日本海側を南下し始めた。一派を率いる若き王子がいた、名はスサノオ。彼が留まる地には尊敬の証として「熊野」とスサノオの諡号が残された。タタラ技術の鉄を御神体とする熊野宮が祀られ、日高見国は稲と鉄の伝播により範囲を拡げた。  
やがて十三湊よりはるかに規模の大きい美しい地を見つけた、今の奈良盆地である。スサノオは「出雲」と名付け、この国の拠点にしようと考えた。しかしスサノオ自身、渡来人である。この国の国津神を見つけて融合、つまりこの国の一番の娘と一緒にいるのが最良の道だ。出雲の地にも多くの先住民は居たが、小競り合いの最中、女の略奪合戦である。

上七人の娘を取られ、末娘を必死で守る族長がいた。スサノオは米を酒に変え、酔わせて鉄剣を持つての戦いは「オロチ退治」として伝わる。そして末娘を国津神として名前を稲田姫と名付け

た。  
この地で稲田姫との間に五男三女をもうけるが、日本統一を目指し九州への足掛かりとして、島根へと出雲の拠点を移した。スサノオは五十半ばの頃である。

九州遠征には息子の中でも勇壯で目敏い三男ニギハヤヒを同行、後継はニギハヤヒにと決め、天津神と国津神の統合を表す称号、天照国照彦火明命を授けていた。北九州に入ったニギハヤヒは平野部に稲と文明を拡め、温暖な地はすぐに効果をさせた。地名も「大和」、部族も「物部」と名付けられる。

スサノオは九州先住部族の和平にと熊本高原地へと進んでいた。日向族と熊襲族との和議調停は不調に終り、熊襲を鹿兒島へ追いやるのが精一杯。しかし日向族は大いに助かる。そしてスサノオは族長イザナギ、イザナミの一人娘を娶る事になった。今という現地妻である。

この三十歳も年下の妻にスサノオが付けた名が、後に混乱を招く。息子ニギハヤヒに授けた称号と同じ「天照」を付けてしまったのだ。二人が住んだ地が、山都（旧蘇陽町）の幣立神宮周辺である。ちなみに幣立とはホビ インディアン語で「扉を開く」の意である。後に拠点を大分宇佐に移し、スサノオは政治、天照は祭祀に活躍した。二人の間に三人の娘もできた（宗像三女神）。

一部を除き九州征服を終えたスサノオとニギハヤヒは九州大和王国の東遷を図った。ニギハヤヒは故郷奈良出雲へと凱旋。九州大和の物部二十五部族を従えて小倉から瀬戸内海を渡つて生駒入りし、長髓大王の妹の三炊屋姫を娶り、新大和大王の座に君臨、名実ともに日本統一を築き上げた。スサノオはこの後に島根出雲へと帰り生涯を終え、当地方では最大級の熊野大社に祀られる（こ

の時出雲大社はまだ無い。出来たのは後々の事である。

一方、スサノオらが東遷した後の九州統治は、スサノオの末娘の養子が呼ばれ任務に当たった。この婿養子は宮崎の地でスサノオ 天照の長女を現地妻に迎え三人の子を持つていたが若死にした。そして始まったのが九州の相統権争いである。婿養子には島根出雲に三人の子がいた。九州にも三人の子、それも天照の孫である。天照はこの深刻な事態に悩む。「天の岩戸」である。

一族はこの機に天照を担ぎ出し九州独立を図るチャンスと蜂起する。天照は政治 祭祀を代行する形で宮崎高千穂から北九州の元大和の地へと移り、再婚もして天照の称号を日霊女と変え、九州の女王となるや才覚を發揮した。かつての夫スサノオから得た知識を持つ日霊女は、一般の民には超能力者に見えたのかも知れない。中国魏王の知る所となったのもこの頃で、大和国は邪馬台国、日霊女は卑弥呼と「魏志倭人伝」に書かれ、金印も贈られている。

二四八年、日霊女の死によつて内乱が始まる。女王の座を孫娘が継ぐか、息子が大王の座に着くかの争いである。身内の泥沼の争いに嫌気がさした孫達四人は、東遷した大和の地への移住を考えた。二ギハヤヒ大王の崩御の噂は知っている、かつての属国だからきつと迎え入れてくれるだろうと兄弟四人は考えたのだろう。末子の名は神武である。

まず宮崎へ引き返し一族と共に海路で生駒の地へと向かった。まさかこれが戦いになるとは思ってはいなかったろう。侵略戦争に妻や子らを同伴など考えにくい。武器を携えていたために生駒で戦いになり神武は兄を失った。海を南下し熊野側

から上陸を試みようとするが、嵐の海でまた兄二人を失うという不運続き。やつと葛城山に辿り着いた時には、戦力など既に無い程のポロポロ状態で、大和の豪族加茂氏の情けをかけてもらい、和議を入れてもらいに生駒山へと向かう。

その時不思議な自然現象が起きた。突如として暗雲立ちこめ嵐が起き、大和軍勢も身を伏したその時、暗雲の切れ間から一筋の金色の光柱が地に降りて神武を照らし浮かばせた。その光景は大和の祭祀を司る物部家には、金の鴉が神武に舞い降りる天啓と映り、二ギハヤヒ大王の後継者となるべき人物の出現でもあった。

物部代表の長髓大王は、神武を大和の王として受け入れるも、諸条件を示した。大和の祖霊、奇稲田日女命、建速須佐緒命、奇玉饒速日命の三柱を崇め敬う。王は日向系から出し、后は出雲系(物部)の血統を継ぐ者とする等の条件を、神武は全て承諾した。そして宮崎から同行した妻と子を退去させ、二ギハヤヒ(物部)の血統の五十鈴姫を後に迎え葛城山に居を構えた。これが「国譲り」である。

まだ問題はあった。かつての属国の神武に仕えるのに反対する物部の部族もいて、長野の諏訪、スサノオの上陸地十三湊へと移住地を求め、大和の地より去っていった。十三湊の新たな王国は長髓彦の名を持っていたが、その後、アラハバキ族(後の安東一族)として繁栄していった。

ここで私の夢物語は終るのだが、この文の最初の問題に戻る。神武が即位してから三百五十年後の五八七年、祖霊を神と敬ってきた神道物部は、仏教崇拜の蘇我によつて朝廷より姿を消した。天皇は神道から仏教へと宗教を変えたのである。そこへ出雲(物部)では無く、日向系の女の天皇、

持統天皇の出現。持統天皇にすれば、古代の神道の歴史が不都合で仕方ない。藤原不比等の提案で、大和の前身の出雲の存在を消去し、日向系神武から歴史をスタートさせ、それ以前の歴史を神話と化してしまうことにした。

まずは物部神道の拠点地石上神宮から莫大な資料、証拠なる物を没収 隠滅し、スサノオ、稲田姫、二ギハヤヒの三柱の存在を不確定にし、古代史神話の人物とした。スサノオを祀る熊野大社は当地方最大の建造物であったが、新たに日本最大級の高さを誇る出雲大社を建て、注目の眼を向けさせた。出雲大社は古いと思われるが実際は七一六年の創建で、『古事記』の書かれた四年後である。それも仏教に変えた後に新しく日本一の神社を建てるには余りにも不自然である。しかも宮崎で没したスサノオの婿養子に「大國主命」の称号を付け祀っているのである。大國主は二ギハヤヒの別称である。

「国譲り」「オロチ退治」も大和出雲から島根出雲の事件へと遠ざけた。スサノオと天照の立場を逆転させ、荒くれ弟のスサノオを演じさせ悪印象を与え、天照に良き印象を持たせ伊勢神宮に日向系天照を祀り、二ギハヤヒの天照の称号を剽奪した。神武天皇が武力で大和を勝ち取った等々、天皇出自の万世一系の系譜を新たに作らんとするに、物部祖先のスサノオ、稲田姫、二ギハヤヒの栄光と存在が邪魔だったようだ。

#### \*表紙写真について

津軽平野にも短い夏が訪れるある日、遠々と地平線へと延びる道を見つけた。赤い鳥居と社が、この道の番人のように構えていた。道を進むと小さな町に辿り着いた。太宰治の生まれ故郷、金木町だった。八十年前、太宰治もこの道を通り、この社に掌を合わせていたのではないだろうか。

# A W T C 日誌

5月13日 大倭病院では「看護の日」のイベントとして病院前駐車場、地域の恒例行事にな



つている健康チェックと健康相談を行いました。写真は、昼休みに参加している大倭殖産(株) 大倭印刷(株)の社員で

夕方、大倭会館で紫陽花邑各家庭のプロパンガスを都市ガスに変えるための大阪ガスによる説明会が開かれました。

5月15日 大倭神宮月次祭。

5月19日 お産のため長男智英ちゃん(2歳)を連れて邑へ帰り中だった井野佐緒里さんに、無事次男(慶英ちゃん)誕生。中島健 佐栄子夫妻には4人目のお孫さんです。

5月20日 夜、交流の家でF I W C 定例委員会。

5月22日 第284回大倭会文化行事で、京都山科の天智天皇陵と坂上田村麻呂公墓へ。田村麻呂さんの墓の案内板でたまたま翌5月23日がご命日と知り、その心をこめて各自お参りしました。報告記事を7月号で掲載します。

5月23日 大倭神宮月次祭。

5月24日 午後2時から大倭病院及び宗教法人大倭大本宮の決算役員会が行われました。

5月26日 福岡

5月27、29日 馬場美佐子(埼玉川越市) 玉川川鶴子(石川千鶴子(東

- \*午前中を予定しています。
- \*泥で汚れてもいい服装で。(着替え・タオルは各自で準備)
- \*軍足・飲み物は用意します。

## 7月3日(日)

午前9:00~小雨決行(大雨は1週間後)

連絡先 TEL 0742-41-4615 (玄徳院)

5月27、29日 馬場美佐子(埼玉川越市) 玉川川鶴子(石川千鶴子(東

京都文京区)さん姉妹が来邑。5月29日 大倭会館で故森下糸さんの五十日祭が行われ、夫の故新蔵さんが入っている大倭墓地に納骨されました。

6月5日 やや曇りで緑のそよ風の吹く天気の下、馬場田での田植え。最初に子供達が北川俊秋さんの指導で一斉に田植えを経験しました(左写真)。参加者は子供達(8人)も入れて総勢40人となり順調に昼前には田植えを終了、こちらが楽しみな人も多い宴会となりました。舞鶴から藤本宏秋さんや店の常連さん、若い女性スタッフ達が来てくれると、昇ちゃんは俄然やる気になって存在をアツピール。



(右写真)。各施設の住苑者職員が参加しての熱戦でした。(菅原園)

5月12日 4人の住苑者が、天王寺動物園に遠足しました。(須加宮寮)

5月22・29日 身障者スポーツ大会で池側正美さん100m走3位、梅本房子さん60m走3位、関輝さん100m走2位、林真次郎さん50m走3位でした。(長曾根寮)

5月19日 誕生会で祝った後、定例懇談会を行いました。

6月2日 イトーヨーカドーより人気の出張スーパ(食品)。(八重垣園)

5月21日 俳句クラブ。「緑陰や素早く鳥の陰動く」「若葉萌ゆ日課の散歩果たしをり」「梅酒漬け笹に転がる音のよさ」「初夏の館友出展の筆の跡」

# A T M i C

\* 月次祭(大倭神宮) 7月6日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

\* 大倭会主催第四〇回親会 7月10日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

\* 月次祭(大倭神宮) 7月15日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

\* 月次祭(大本宮) 7月23日(土) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

**夏まつり**  
**7月30日(土)**  
 午後3時~  
 必ずが駐車場にて

お問合せ 宿務院事務局  
 TEL 0742-48-3221まで  
 不用品バザーも行いますので、いつもながらご寄贈のほどよろしくお願ひします。

## 編集後記

▼最近は一T部も編集会議の常連になっている。よみがえった録音から昔の法話を順次、掲載していきける予定。そのためにまた、各地の皆さんのご協力を頂いている。お願ひする時の決めざりふは「これがほんまの写経やで」。その内、ネット編集会議というのでもできるかも。(春)